

概 要
第 32 回 市民と市長の対話ひろば ～もりりんと語ろう、宝塚市の未来～ テーマ：市役所周辺エリア（シビックゾーン）の未来を語ろう！～スポーツセンター・末広中央公園・河川敷などをもっと楽しく！使いやすく！～
日時：令和 8 年 7 月 30 日（木） 午後 2 時～午後 4 時 場所：東公民館 ホール 参加者：25 名 出席者：森市長 都市安全部 中村次長 他 都市整備部 中村部長 他 社会教育部 藤田部長 他
《市長のテーマ説明》 1. 趣旨 ・市役所周辺エリア（シビックゾーン）の公共施設の現状を共有した上で、今後のあり方について市民の意見や要望を聞き、集約・検討したい。 2. シビックゾーン内の各施設の現状と課題 ・市役所本庁舎、第二庁舎 本庁舎は築 46 年（村野藤吾氏設計）で永続性のあるデザイン。今秋には市民ホールを開放予定。第二庁舎は築 4 年と新しい。市役所前ひろばは、マルシェやキッチンカーなどで活用している。敷地内の職員食堂は一般にも人気。 ・末広中央公園 築 22 年。阪神淡路大震災の経験に基づく防災公園（貯水槽やベンチなどの防災ツールを配備）。普段は憩いの場やイベント会場として広く活用されている。 ・中央公民館 築 7 年で新しい。集会や自習室等で活用。 ・末広体育館 民間からの譲渡物件であり、築 55 年で老朽化が目立ち、エアコンがなく利便性に課題。建て替えが必要な時期。 ・武庫川河川敷 県管理の土地だが市の公園として指定・管理している。（テニスコート、フットサル、ハーフマラソン等で活用） ・スポーツセンター 総合体育館、武道館（築 40 年）、屋外プール管理棟（築 37 年）、屋内プール（築 34 年）、テニスコート、野球場などがあるが、全体的に老朽化。駐車場の不足・出入り口の混雑も課題。水回りの施設は維持・修繕に多額の費用がかかる。 ・教育総合センター（本館・分室） 本館は築 34 年。分室は築 57 年と非常に古く、対応が必要。不登校支援や教員研修、図書分室などで利用している。

3. 本市が抱える共通の課題

- ・人口倍増期（約 55 年前）に整備された施設が多く、今後 10～20 年で一斉に更新時期を迎える。
- ・人口減少により管理人員や税収が減少し、現行施設の管理・維持が困難。
- ・市全体の赤字は今後 10 年で約 23 億円を見込む。前年の 63 億円から縮小させたが依然として厳しい。
- ・各施設の年間維持費・改修費が多額（例：修繕・管理費等でスポーツセンター毎年 2～3 億円規模、市庁舎毎年 3 億円規模、中央公民館毎年 6000 万円など）。人口減に合わせて施設面積（サイズ）の縮小を検討せざるを得ない状況。
- ・市役所内でも人手不足や業務負担の増大が課題となっている。

4. 今後の解決策（官民連携の導入）

- ・市の資金や力だけでは困難なため、民間事業者のアイデアやノウハウを取り入れる。
- ・国土交通省の補助金を活用し、行政・市民・民間の連携による事業プロセスの検討を進める（1 年間の計画）。
- ・民間参入（公園へのカフェ設置やスポーツ施設の民営化など）を進める一方で、障害者向け教室のような「公益性の高い事業」は行政が責任を持って保護・継続する。

5. 市民への意見協力・参加の呼びかけ

- ・今秋にワークショップを開催予定している。
- ・本日の対話ひろばのほか、アンケート（二次元コード）を通じた意見提出も可能。
- ・施設の不満点・改善案、イベントや渋滞対策などのアイデアを幅広く募集する。

《対話》

1 参加者【多文化共生社会のあり方と国際交流について】

- ・施設のインフラ維持だけでなく、今ある公共施設が新たな出会いの場や新しい活動が生まれる場になってほしい。
- ・国際交流協会のボランティア活動を通して作成した、多文化共生に関する新しいパンフレットのキャッチフレーズを紹介。
- ・森市長が考える多文化共生社会についての具体的な考えを聞きたい。

➡市長

- ・多文化共生社会の推進はオフィシャルに掲げている方針であり、国内外を問わず、様々な文化的背景を持つ人々がお互いの文化を尊重し合って仲良く暮らせる社会が大切である。
- ・今後の深刻な働き手不足により外国人雇用は不可避であり、宝塚市でも外国籍の方が増えていくことが予想される。
- ・摩擦を生まないようお互いの文化を理解し合うことが重要であり、既存の市民にとっても新しく来る人にとっても居心地の良いまちづくりを目指す。

2 参加者【公共施設のあり方と宝塚の魅力発信について】

・公共施設はできるだけ小さくし、市民が求めるサービスとの最小限のマッチングに徹すべき。ジムなどは民間が充実しているため、個人の自主的な参加を促し、市の財政面や市民の希望とのミスマッチを解消すべきである。また、市役所の窓口も多すぎるため改善が必要。

・宝塚市は人気の高い地域であり、シビックゾーンも全国から人が集まる魅力的なものにすべき。例えば、阪急電鉄とコラボレートした宝塚ミュージアムのような、全国に響く施設にすべきではないか。

➡市長

・すでに民間で担えるサービスがある現状を踏まえつつ、障害者支援や経済状況に関わらずスポーツを楽しめる環境といった公益性の高い部分をどう担保し、棲み分けを図るかが大切である。

・手塚治虫生誕百年事業における近隣市との連携のように、宝塚のブランド力を活かして全国から人に来てもらえる工夫は重要である。

3 参加者【企業誘致・ふるさと納税・子育て支援と公共施設のあり方について】

・シビックゾーンへのアクセスが悪いので、末広中央公園の広い広場や周辺の整備はそれほど必要性を感じておらず、現状のままで十分である。

・税収増となるように、他市に負けない企業誘致を進めてほしい。また、ふるさと納税について、宝塚大劇場のチケットを返礼品に加えることでさらなる増収につながるのではないかと。投資目的で住まないマンションへの課税なども検討してほしい。

・高齢者向けの施設よりも、保育所、病児保育、学童保育、子ども食堂などの子ども対策に力を入れてほしい。

➡市長

・大きな土地が必要な大規模工場よりも、高い生産性を持つ企業や、伊丹空港や高速道路へのアクセスといった宝塚市の立地優位性を活かせる企業の誘致を検討・推進している。

・ふるさと納税は、阪神7市1町の中では上位(2位)に入る実績がある一方、地元の農産物が少ないなどの構造的課題がある。宝塚歌劇関連ではすでにDVDなどが売れており、今後はいただいた意見を踏まえつつブランドを活かした工夫や、税制優遇のある企業版ふるさと納税の営業活動にも力を入れていく。

・子育て世代のニーズ(遊び場など)の声を直接聞きながら、必要な支援策やサポートについてしっかりと検討・決断していく。

4 参加者【シビックゾーンの活用アイデアと子育て世代の視点について】

・末広中央公園などは綺麗に管理されている一方、厳しい禁止事項の看板が目立ち、日陰やミスト、立ち止まれるような魅力が少し足りず、イベント時以外は人が立ち止まらない空間になっている。防犯面の対策(防犯カメラ等)も気になる。

・活用アイデアを紹介する。学生(大学生・高校生)が企画・実行するイベントの毎月開催、地域移行する部活の成果発表会の実施、アート作品やオブジェの定期的な入れ替え展示、シェアサイクルを補うレンタサイクルの設置、スポーツセンターと河川敷をつなぐジップラインの設置、河川敷に市民が育てる菜園を作り、市役所の食堂で提供する、体育館からスポーツセンターまでの道の装飾、リサイクルカーやキッチンカーの日常的な出店

はどうか。

➡市長

・シェアサイクルはすでに市内の駅や末広中央公園等に設置され非常に活用されている。一方で、市役所前の宝塚新大橋の老朽化や宝塚市全体の慢性的な渋滞解消のためには、都市計画道路（伊子志旭町線など）の整備が不可欠であり、少し時間をかけながら取り組んでいる。

・イベントは行政が考えるよりも市民や民間、各種団体がやりたいことを実現してもらうのが一番であり、市はそのための黒子としてサポートしていきたい。

・末広中央公園でボール遊びやスケートボードを禁止しているのは安全性（危険防止）の配慮からである。ただし、安全に遊べる場所をどう確保するかは検討が必要。また、近年の夏の猛暑により、屋外スポーツよりも屋内スポーツ（バレー、バドミントン、ダンス、卓球など）の人気の高まるなど、時代の変化も踏まえて考えていく必要がある。

5 参加者【民間活用の手法と公共施設の運営について】

・財政が非常に厳しい中なので、温泉施設を引き合いに出し、シビックゾーンの施設運営に関しても、民間へのノウハウ委託や経営の預け入れなどについて、市長の具体的な考えを聞きたい。

➡市長

・従来の指定管理は市がかっちりと運営方法を決めていたが、施設の用途（温泉施設など）の公益性や縛りをかけつつ、民間により高い自由度を持たせる方法（信託的なアプローチなど）を試みたところ、事業者から前向きな意見が集まった。

・民間の関わり方は 100 対 0 ではなく、公益性をどれだけ担保しつつ民間の自由度を高めるかというスペクトラム（度合い）の問題である。

・現在のスポーツセンターや公民館などは指定管理や第 3 セクター（スポーツ振興公社など）で運営されており、比較的公の色が強い。一方で、公園内のカフェなどのように民間により高い自由度を認める手法もあり得る。現時点では結論を固定せず、市民の意見や思いを広く聞きながら、どの程度のバランス（公と民の割合）が最適かを見極めて判断していきたい。

6 参加者【公園の利用ルール（ボール遊び等）と施設の省エネ対策について】

・子どもには広い空の下でボール遊びやボードをしたい思いがあるため、すべて一律に禁止するのではなく、場所を区切るなどしてうまく使い分けができるようにしてほしい。

・公共施設にかかる電気代は非常に大きいのではないかと。太陽光パネルの設置など、電気代を抑えるための工夫がさらにできれば財政的にも助かるのではないかと。

➡市長

・市役所前などでも実際にスケボー等が見られる実態があり、やりたい気持ちの理解を示しつつ、他の利用者の安全性をどう保つかを含めて場所の区切り方などを工夫する余地がある。

➡担当部

・市役所本庁、第二庁舎や中央公民館などの屋上には太陽光パネルを設置済み。

➡市長

・建て替え中の新しいクリーンセンターではゴミの燃焼による発電能力を拡大する予定。市施設の電気の調達において、競り下げ方式であるリバースオークションを一定導入し、コスト削減と再エネの比率向上を同時に見込んでいる。

7 参加者【宝塚市の歴史とまちづくりに関する意見等】

・スポーツセンターのプール等について言及があったが、民営スイミングスクールを市も共同運営し、駐車場の地下化や屋上化を行い、将来的に駅から子どもが直接行けるようになれば市内全域から利用しやすくなる。送迎の負担も軽減されるが、狭い道の安全確保（ガードマンやボランティアの誘導など）が重要である。

・宝塚市の歴史（川面地区の変遷、花のみちが昔の川の堤防であったこと、小林一三氏による開発の経緯、阪鶴鉄道から福知山線への移行、学校の敷地寄付など）について言及。

・市民病院の場所や周辺の池の活用などを含め、関係する地主や民間にとってもメリット（利益）が出る形にすれば利害関係が調整され、まちづくりがスムーズに進む。小林一三氏の本にもあるように、みんなが良くなることで人が集まるまちにすべき。

➡市長

・小学校のプールの今後のあり方を検討する中でも、民間のプール事業者との連携が話題に挙がっている。いただいた意見も宿題として持ち帰り、今後の施策に活かしていきたい。

・みんなにとってプラスになることで活性化するという考え方は、民間・市民・行政の連携においてまさにその通りであり、小林一三氏の手法から学びたい。

8 参加者【宝塚市の魅力発信と市民の声の汲み上げについて】

・30年前に中山五月台5丁目に家建て、阪神淡路大震災の際も被害がなかった経験から、宝塚市は津波や地震に強く、日本一のまちだと思っているが、こうした素晴らしい宝塚市の魅力を外に売り込むPRが少し欠けている。

・これまで各種市民委員などを務めてきたが、学者や市職員の議論が中心になり、一般市民の意見がなかなか反映されにくく感じることもある。本当に心で思っている人たちの声をもっと拾い上げる姿勢が必要である。

・誰でも簡単に育てられるそばを市民農園などで栽培・活用するなど、ユニークな取り組みや売り込みの工夫ができるのではないかな。

➡市長

・宝塚市の魅力をアピールすることは市役所職員がもっと力を入れていかなければならないと認識している。

・市民の皆様の声にしっかりと耳を傾け、市民が望む形を実現できるよう職員一同頑張っていきたい。

9 参加者【武庫川河川敷の活用とドッグラン設置の提案】

・第1回ハーフマラソンからの変化を通じて、裏方の職員や関係者の努力で河川敷が美しく整備されてきたことに感謝している。

・河川敷に有料のドッグランを設置し、自動ゲート等の仕組みで管理・運営（市の職員が直接運営するのではなく、利用者負担やシステムによる管理）することで、整備費用に充

ててはどうか。イベントを通じて、子どもや飼い主同士の交流が生まれる楽しい広場にできるのではないかな。

- ・駐車場の料金が高くなると若い世代や孫の世代がしんどくなるため、市役所の駐車場を割安にするなど、若い世代が集まりやすい工夫をしてほしい。

➡市長

- ・犬の散歩をしている方が増えている現状やドッグランへの需要を認識している。ドッグランの運営を市が直接行うのは現実的ではなく、民間の事業者やこんなことをやりたいという意欲のある人たちと一緒に考えていく形が望ましい。

- ・市がすべてを考えすぎず、市民や民間からの素敵なアイデアややりたいという声を実現できるような仕組みづくりを、河川敷の活用も含めて検討していきたい。

10 参加者【企業誘致の方針、大学の動向、およびイベントの捉え方について】

- ・高付加価値・労働集約型の企業誘致を進めてほしい。また、多くの個人市民税を納めてきた身としても、今後の税収増に向けた取り組みに期待している。

- ・某所で国際的な大学や専門学校などの誘致を検討しているという噂を聞いてモヤモヤしていたため、差し支えない範囲で実態を聞きたい。

- ・普段関わらない人同士の交流が生まれるような街であってほしい。

➡市長

- ・企業誘致（高付加価値労働集約型）の可能性は引き続き模索している。一方で、宝塚市の税収の大きな特色として個人市民税の割合が非常に高い（微増を続けている）という点があり、周囲の市からも羨ましがられている。裕福な市民がここに住んでいて居心地が良いと感じてもらうことも税収面で非常に大切である。

- ・市として大学を直接誘致（優遇措置等）することは考えていない。旧宝塚大学の敷地については、現在は民間の事業者が取得しており、教育目的等で活用していく計画であるという話は聞いている。行政が主導する話ではないが、若い世代や学生が増えることは良いことであるため、動向を見守りつつ応援していきたい。

- ・他の市町から見ると、宝塚市はもともとイベントの数が非常に多い部類に入る。今後はイベントの数以上に、一つひとつのイベントの魅力や盛り上げ方をどう高めていくかが重要であると考えている。

11 参加者【継続的な対話の場と長期的なグランドデザインについて】

- ・今回のような単発の対話で終わらず、市民同士が相互に意見交換をしながらシビックゾーンのあり方を考え合える場（ワークショップなど）の工夫を続けてほしい。

- ・宝塚市の公共施設は機能が分散して不便な点もある。10年、20年、50年先を見据え、交通手段やどこにどんな施設を置くべきかという長期的なグランドデザインに基づいてお金をかける場所を整理し、その見通しを市民に共有してほしい。

➡市長

- ・市民と市長の対話ひろばはどうしても市民対市長の構図になりがちである。秋にはより突っ込んだ話し合いができるワークショップを予定している。アンケート等も含め、様々なチャンネルを通じて継続的に市民の意見や思いを拾っていく方針である。

- ・宝塚市内の各地域（小浜の医療拠点、売布の福祉拠点、シビックゾーンなど）が、逆瀬

川駅から縦のラインでつながる。財政が厳しい中、今後は施設を効率よく集積させていくことが重要であり、いただいた長期的な視点やグランドデザインに関する指摘を踏まえ、市民の意見を集めながら考えていきたい。